

# 赤穂城跡(赤穂市)

築城年代:慶安元年(1661年)、築城者:浅野長直

縄張図/近世城郭史上、非常に珍しい変形輪郭式の海岸平城/藩の家臣で軍学師範の近藤正純が設計し、そのうち二之丸門虎口の縄張は、当時の著名な軍学者であった山鹿素行の手が加えられたと伝えられている

## 国史跡赤穂城跡案内図



# 城郭配置図



城域は三方を山に囲まれ、東に千種川(加里屋川)、南は瀬戸内海に面し、清水門の南にある船入は船が出入りできるようになっていたと云う



それでは大手門→番所跡休憩室→近藤源八宅跡長屋門(部分)→大石良雄宅跡長屋門→武家屋敷公園→清水門→二之丸門と進んでみよう



正面は三ノ丸東側の大手門と外堀を渡る太鼓橋



「史跡 赤穂城跡」と記された標柱が立つ



そこで右手を見たところ/前方は大手隅櫓



同じく左手を見たところ





大手隅櫓/南東側



大手隅櫓と城壁を外堀が取り巻く/左手が大手門



そこで左手を見たところ



同じく右手を見たところ



大手隅櫓/北東側



こんな感じで外堀が巡っている



大手隅櫓をアップで見たところ/外堀の左手に見える城郭のような建物はお菓子屋さん







さて、城内(三之丸)へ入ってみよう/大手門は高麗門形式



左手の外堀を見たところ



その先はこんな感じになっている



大手門を潜ると、石垣によって枳形が形成されている/枳形右手に巨大な櫓門が建っていたが、現在は発掘調査で出てきた礎石位置がプレートで示されている(右奥に見える白い部分がそれ)/右手前に木柵が見える



木柵の中を覗くとこんな塩梅/排水装置だろうか



これは柵形正面で威容を誇る大きな石



振り返って、大手門の内側の櫓形の様子を見たところ



枡形を右へ/櫓門があったことを示す、門柱の礎石跡が足元に示されている/奥の建物は、櫓門を通る人を検問した役人が詰める、番所を再建したもので、今はパネル展示コーナーとなっている





これは番所から見た、柵形と櫓門礎石/幅8.9m、奥行4mの巨大な二階建ての城門が、ここに建っていたらしい



右後方から見るとこんな感じ/左手の土塀に上がるための雁木(石段)はかなりの急勾配



そこから右手を見ると道は柵形の石垣を回り込んで続く/右奥に見える建物は大石神社



回り込んだ道を見たところ



そこで左手に振り返ったところ/前方の番所を見よう



番所のパネル展示コーナーの様子



## 大手門及び大手門枡形の説明パネル

### 大手門枡形

赤穂城の表虎口である大手門は、石垣を方形に積上げた枡形と高麗門、櫓門の二重の城門を備えた最も重要な枡形門であった。枡形は打ち出す兵を待機させたり、敵兵を閉じ込めて攻撃するためのもので、その規模は長辺10間（約19・8m）、短辺6間（約11・8m）、面積234㎡である。現在ある高麗門は、隅櫓、土堀とともに昭和30年（1955）に再建されたものである。

枡形石垣は、明治19年（1886）にその形状を大きく改変され、その後周辺は赤穂大石神社の境内となっていたが、文化庁の国庫補助事業によって公有化が図られ、平成15年（2003）に石垣の修復及び周辺整備が完成した。

発掘調査によって、枡形石垣、櫓門跡、番所跡、上水道施設、排水枡、大石内蔵助屋敷土堀石垣など多くの遺構が見つかった。櫓門は、幅4間半（約8・9m）、奥行2間（約4m）であったことが明らかとなり、新たに板石を埋め込んで礎石の位置を示している。また、門の前後では川原石を並べた葺敷きの雨落ち施設も見つかっている。この休憩所は、発掘調査で検出された番所跡の位置に、ほぼ同規模の番所を模して建てられたものである。当時、番所には門番として足軽3名、下番2名が詰め、大手門の警護にあたった。



枡形内上水道跡



櫓門跡



櫓門雨落ち施設



赤穂城内水筋絵図面（大手門部分）  
赤穂市教育委員会蔵



赤穂城下町絵図（大手門部分）  
個人蔵



大手門と隅櫓（明治初年撮影）  
原坂花島寺蔵

# 大手門枡形

赤穂城の表虎口である大手門は、石垣を方形に積上げた枡形と高麗門、櫓門の二重の城門を備えた最も嚴重な枡形門であった。枡形は打ち出す兵を待機させたり、敵兵を閉じ込めて攻撃するためのもので、その規模は長辺10間（約19・8m）、短辺6間（約11・8m）、面積234㎡である。現在ある高麗門は、隅櫓、土塀とともに昭和30年（1955）に再建されたものである。

枡形石垣は、明治19年（1886）にその形状を大きく改変され、その後周辺は赤穂大石神社の境内となっていたが、文化庁の国庫補助事業によって公有化が図られ、平成15年（2003）に石垣の修復及び周辺整備が完成した。

発掘調査によって、枡形石垣、櫓門跡、番所跡、上水道施設、排水枡、大石内蔵助屋敷土塀石垣など多くの遺構が見つかっている。櫓門は、幅4間半（約8・9m）、奥行2間（約4m）であったことが明らかとなり、新たに板石を埋め込んで礎石の位置を示している。また、門の前後では川原石を並べた霰敷きの雨落ち施設も見つかっている。この休憩所は、発掘調査で検出された番所跡の位置に、ほぼ同規模の番所を模して建てられたものである。当時、番所には門番として足軽3名、下番2名が詰め、大手門の警護にあたった。

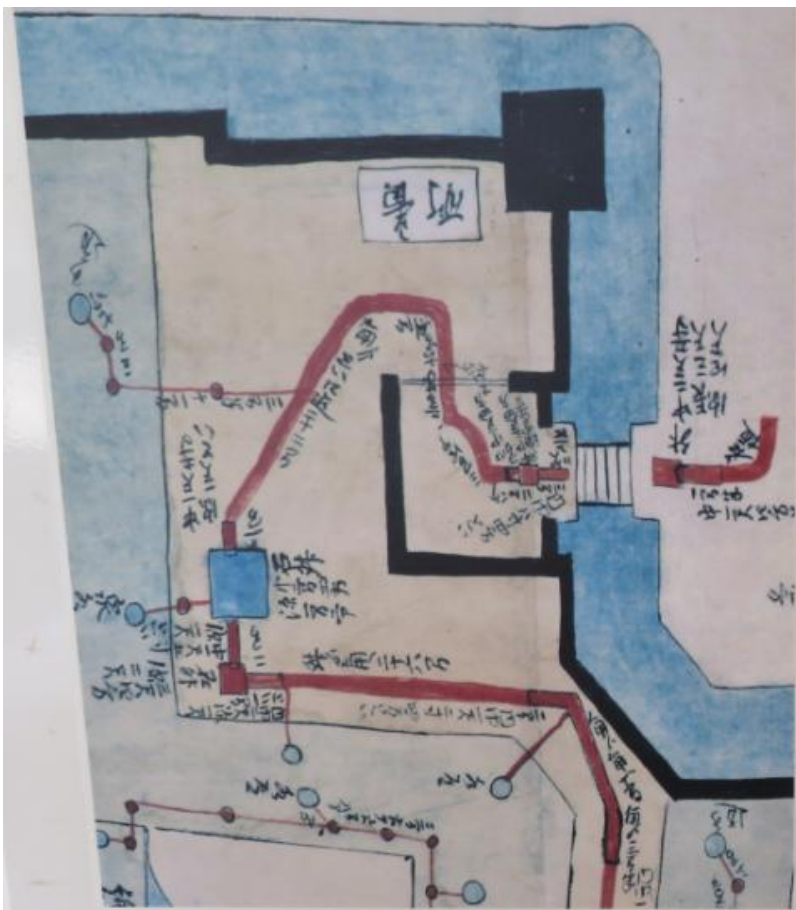


破却される前の大手門と隅櫓



大手門と隅櫓(明治初年撮影)  
原版花岳寺蔵

絵図



赤穂城内水筋絵図面 (大手門部分)  
赤穂市教育委員会蔵



赤穂城下町絵図 (大手門部分)  
個人蔵

発掘状況



枡形内上水道跡



櫓門跡



櫓門雨落ち施設

これは枡形の石垣の裏側を西側から見たところ



そこで左手を見たところ



同じく右手を見たところ



その先に進んで振り返って見たところ/大石神社が見える/右手に柵形の石垣の上に上がるための石段が見える



そこで左手を見ると右前方に長屋門が見える





これは近藤源八宅跡長屋門



赤穂市指定有形文化財 建造物 指定番号三二一

# 近藤源八宅跡長屋門

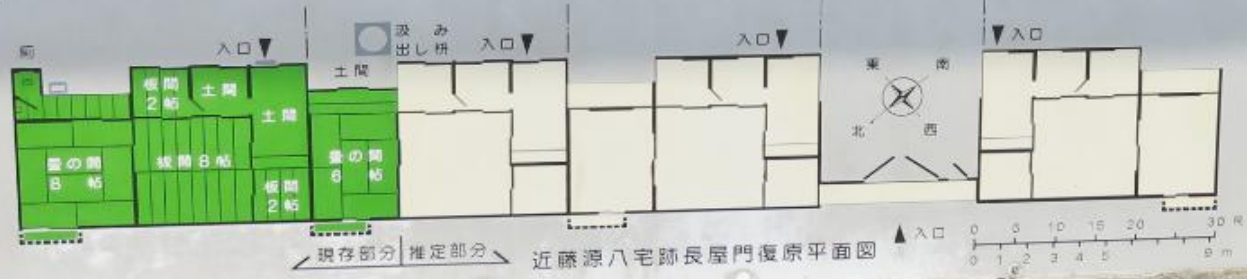
所在地 赤穂市上飯屋一二四番地  
 所有者 赤穂市  
 管理者 赤穂市  
 指定年月日 平成一〇年四月二七日

近藤源八正憲は甲州流軍学を修め、千石番頭の重職にあつた。源八の妻は、大石内蔵助良雄の叔母にあたり、大石家とは親戚関係にあつたが、最初から義盟には加わらなかつた。源八の父である三郎左衛門正純も、甲州流軍学者であり、兵法に則つて赤穂城築城の縄張り設計を行った。

近藤源八宅跡長屋門は、「源八長屋」の愛称で親しまれているが、現存している建物は長屋門の長屋部分である。門部分は、大石良雄宅跡長屋門の斜め向かいにあつたと考えられ、長屋部分を四戸分に別け、それぞれ下級武士の住宅として使われていた。現在は、その内の北端部の一戸とその南隣りの一戸の北端の一部屋が残されている。この長屋門は、一八世紀以降に建て替えられたものと推察されるが、当時は総長二一間半（約四二・三m）の長大な長屋門であつた。

城内に残された江戸期の建物は、大石良雄宅跡長屋門とこの近藤源八宅跡長屋門のみであり、礎石や、柱材、梁材、天井、瓦、壁等の一部を保存し、平成一年三月に解体復原整備が完了した。入り口部分の土間は、炊事場であつたと考えられ、煙出し窓や、天井周囲に残された煤が当時の生活ぶりを偲ばせている。また、箕子野地天井は建築当時の姿を保っており、屋外にある赤穂旧上水道の汲み出し枡とともに人気が高い。

赤穂市教育委員会



その対面には大石良雄宅長屋門がある



# 大石邸長屋門

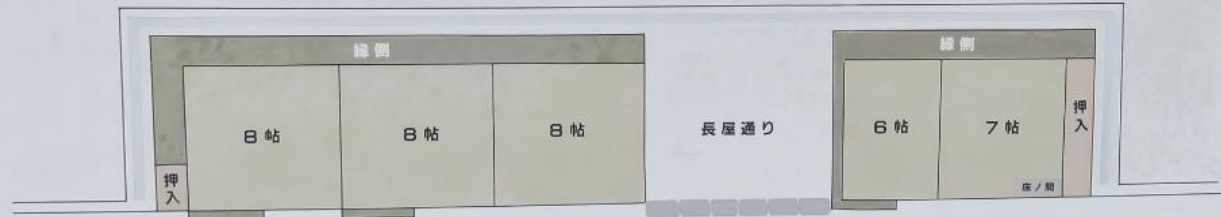
この門は、浅野家筆頭家老大石内蔵助の一家三代が五十七年にわたり住んでいた大石屋敷の正面門長屋である。

門口約二十六・八メートル奥行約四・八メートルの建物で、屋根瓦には双ツ巴の大石家の定紋がついており、元禄の昔に思いを馳せ、内蔵助の偉業を偲ぶ唯一の建物となっている。かつては、内蔵助と主税の父子が朝夕出入りし、又元禄十四年三月主君の刃傷による江戸の悲報を伝える早打ちがたたいたのもこの門である。

安政三年（一八五六年）に大修理が行われ、大正十二年国の史跡に指定された。

更に昭和三十七年に屋根の大修理を行ったが老朽甚だしく、昭和五十二年十一月から国、県及び市の負担により、総工費三、一三八万余円をかけて全面解体修理を行い、

昭和五十三年十月末に復元完了した。



安政年間当時の長屋門平面

さて、そこから清水門のある南東方向へ進む/前方に見える建物は赤穂市立歴史博物館



左手を見ると三之丸の土塁が続いている



アップで見たところ



これは右手にある武家屋敷に入る再建された門のようだ





左手のエリアは奥野将監定良屋敷跡



# 奥野将監定良屋敷跡

組頭 千石

大石内蔵助良雄とは親戚筋になり、内蔵助を補佐し仇討ちの中心人物となるが、主眼は仇討ちより浅野家再興にあつた。元禄十五年（一七〇二）七月二十八日の討ち入りを決定する円山会議（京都安養寺塔頭、重阿弥）に欠席し、数日後脱盟し討ち入りには参加しなかつた。

屋敷は清水門をくぐり左手にあり、表口三十二間程（約五十八・二m）、奥行三十五間程（約六十三・六m）の広さをもち、大石内蔵助宅程度の長屋門があつた。

赤穂市教育委員会

さて、正面が清水門跡/背後の建物は赤穂市立歴史博物館



## 赤穂城 清水門跡

清水門しみずもんは、赤穂城三之丸の東に開かれた門で、川口門とも呼ばれ、幅二間二歩、奥行七尺七寸、建坪四坪の規模であった。門を出ると板橋があり、付近には熊見川がわ（千種川本流の古称）沿いに蔵屋敷（米蔵）、川口番所、御薬煙場があった。また、門の南の石塁と二之丸東北隅櫓すみやくらとの間の二之丸堀には、敵兵の侵入を防ぐために六間一尺五寸の柵さくも設けられていた。

なおこの門は、元禄十四年（一七〇二）四月十九日に幕府に城を明け渡した後、大石内蔵助が名残を惜しみつつ退去したことで知られている。

右手の二之丸と三之丸の間の中堀(二之丸堀)越しに石塁と二之丸北東隅櫓台を見たところ



左手の清水門残存石垣及び土塁を見たところ



これは清水門の先にある板橋で左手に外堀を見たところ



同じく右手に二之丸北東隅櫓台を見たところ/石塁の左手は外堀であるが、ここは船入で船が出入りできるようになっていたと云う





少し進んで振り返って清水門跡を見たところ



さて、ここが赤穂市立歴史博物館





こんなものも



これは船入へ繋がる加里屋川



反対方向を見たところ/右手は博物館



さて、博物館から武家屋敷公園方向へと戻ろう



改めて二之丸北東隅櫓台を見たところ/左手が船入





右手の石罫/折れがあるのが見て取れる/右前方は東隅櫓台の石垣



変形輪郭式と呼ばれる縄張り/二之丸は東仕切門(上)と西仕切門(下)によって、右と左に二分割されていた/それでは清水門→武家屋敷公園→二之丸門→山鹿素行像→大石頼母助屋敷跡→本丸門→御殿跡→天守台→厩口門→大石神社へと進む



これは武家屋敷公園南側の中堀(二之丸堀)



二之丸は、本丸を取り囲むように配され、仕切門によって南北に区切られ、北側が前曲輪、南側が後曲輪とも云われている



ここに二之丸門があった



## 二の丸門跡

赤穂城は、正保2年(1645)に浅野長直が常陸国笠間藩から入封し、近藤三郎左衛門正純に築城設計を命じ、慶安元年(1648)より13年に亘る歳月を費やし、寛文元年(1661)に完成した甲州流軍学の海岸平城である。

ここ二の丸門跡は二の丸の入口として、虎口はやや南よりの西方白虎に開かれた切妻式櫓門が構えられていた。二の丸門虎口の縄張りの一部は、浅野長直に仕えた軍学者山鹿素行が、承応2年(1653)に変更したと言われる。



取壊し以前の二の丸門(明治10年代頃の撮影)  
〈原画 花岳寺所蔵〉

文久2年(1862)には、この付近で赤穂藩国家老森主税が、藩改革を唱える藩士たちに暗殺された。この事件は、文久事件と呼ばれ、明治4年(1871)の日本最後の集団仇討ち『高野の復讐(和歌山県高野町)』の発端となった。

また、二の丸門をはさんだ、東方の東北隅櫓台から西方の北隅櫓台にかけての石垣土塁は、明治25年(1892)千種川の洪水による災害復旧と流路変更のため、築石として使用され取り除かれた。

平成10年3月

赤穂市教育委員会

本丸方向へ進む/左手にも二之丸門跡の説明坂が立っていた



山鹿素行により、近藤三郎左衛門正純が設計した赤穂城の二之丸門付近の縄張りの一部が変更されたと記されている

## 二之丸門跡

ここは赤穂城二之丸門のあった場所である。

浅野長直に仕えて赤穂に滞在していた軍学者

やまがそ

こう

山鹿素行が、築城工事中の承応二年（一六五三）、

この門周辺の縄張りの一部を変更したことで知られている。

赤穂城二之丸の面積は一万七二五九坪であった。

二之丸門は櫓門で、桁行四間半、梁行二間、口幅三間一步、高さ二間、建坪九坪という規模であった。

また、文久二年（一八六二）十二月九日に、赤穂藩主森家の国家老森主税ちからが、藩政に対して意見の異なる藩士たちに暗殺されたのがこの付近である。いわゆる「文久事件」である。この事件は、明治四年（一八七二）二月に和歌山県高野山で起こった「高野こうやの仇討ち」の導火線ともなった。

ここに置かれている半畳ほどの二つの大きな石は、小石を持って叩くと、「かんかん」という音をたてることから、誰言うことなく「かんかん石」と呼ばれている。

赤穂義士会



これが「かんかん石」であろうか



これは山鹿素行の銅像



## 山鹿素行先生銅像

兵学者・儒学者として高名な山鹿素行（一六二二～一六八五）は、承応元年（一六五二）から万治三年（一六六〇）の間、赤穂藩主浅野長直に千石で召し抱えられ、承応二年には赤穂城築城に参画して二の丸虎口の縄張りを一部変更し、家中に兵法を指南した。

その後、寛文五年（一六六五）に「聖教要録」の著述が幕府の忌諱に触れ、翌年から延宝三年（一六七五）まで赤穂に配流され、二の丸内の家老大石頼母助邸の一隅に謫居した。

配流中は、藩主や重臣のもてなしを受けることも多く、この間に「四書句読大全」「中朝事實」「武家事紀」「謫居童問」など、素行の学問を代表する大著を完成している。

大正一四年（一九二五）、謫居跡に建立された素行先生の銅像は、平成一〇年に赤穂城跡公園整備のため現位置に移転した。

更に進むと正面に本丸門が見えて来る/右側には門と築地塀がある/このエリアが二之丸



これは家老の大石頼母助屋敷を囲む薬医門スタイルの屋敷門と築地塀



この屋敷門の向こうには大石頼母助屋敷と二之丸庭園が広がる



# 大石頼母助屋敷門

おおいしたのものすけやしきもん

構造形式 薬医門（一間一戸潜門付）

木造 切妻造 本瓦葺

主要寸法

桁行三・一八m 梁間一・九一m

軒高二・八八m 棟高四・五五m

大石頼母助良重は、大石内蔵助良雄の大叔父にあたる人物で、家老職にあった。藩主浅野長直に重用され、二之丸に屋敷を構え、その妻は長直の娘を迎えた。山鹿素行が赤穂に配流された際、素行はこの屋敷の一角で八年余りを過ごしたという。平成十三年にかけて実施された二之丸庭園の発掘調査によって、頼母助屋敷の門跡のほか土塀基礎石列、建物礎石、上水道遺構などが見つかった。門は、発掘調査によって見つかった遺構に基づきその規模及び構造が検証され、薬医門形式の屋敷門として平成二十一年三月に整備された。

ここが屋敷跡/周囲を土塁が廻っている/右手に北隅櫓台が見える





近づいて見たところ



「北隅櫓台」と記された標柱が立っている



これはその土塁の断面表示を見たところ/左手が二之丸の屋敷跡で、石垣の右手に水堀が巡り、その右手は三之丸のエリア



こんな塩梅/正面が北隅櫓台/右手が三之丸のエリア



ここから先が二之丸庭園のようだ



# よみがえる 旧赤穂城庭園 二之丸庭園

二之丸庭園は、赤穂城二之丸北西部に存在した大規模な廻遊式庭園で、東は大石頼母助屋敷から始まり、西は西仕切りにまで及び、ひょうたん形の雄大なものでした。

山鹿素行の『年譜』の中に、この庭園に関連する記載がみられ、頼母助屋敷の一角で滴居生活を送った素行がこの池泉で遊興したことが記されています。それによれば、この庭園には「茶亭」「浮玉堂」「龍船」などがしつらえてあったこと、「海棠」「牡丹」などの植物で彩られていたことなどがうかがえます。

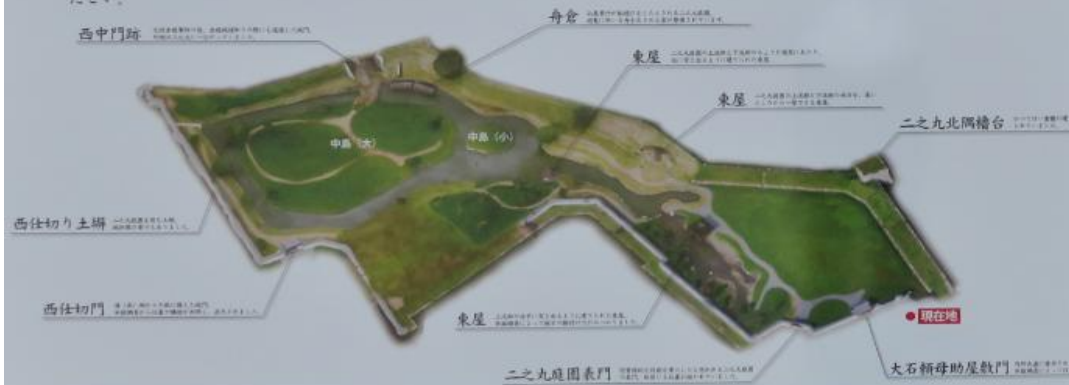
発掘調査の結果を受け、二之丸庭園は本丸庭園とともに「旧赤穂城庭園」として国の名勝に指定され、平成34年度から整備を開始、復元整備を実施しているところです。世紀を経てよみがえる大名庭園にご期待ください。



二之丸庭園の発掘調査



本丸上段部から本丸門を望む 本丸上段部全景 本丸上段部の泉屋敷  
本丸上段部の人工 西仕切門跡 池泉下段部全景



こちらは冠木門



さて、正面が本丸への虎口に建つ本丸門/土橋の両サイドは内堀





標柱と説明板がある



## 国史跡赤穂城跡本丸門（復元）

本丸門は築城時（17世紀中頃）の建造と推定され、明治10年代後半の取壊しまでの約230年間存続していました。現在の本丸門は、平成4年文化庁の地域中核史跡等整備特別事業として、全国で初めて採択され、国・兵庫県の補助を受けて総事業費約6.7億円をかけて平成8年3月に完成したものです。

この平成の復元は、明治時代の古写真をもとに、古絵図をはじめとする文献類、発掘調査の成果を総合的に検討して赤穂産の花崗岩による櫛形石垣、国産材を使用して昔どおりの伝統工法によって、往時の姿によみがえらせています。



取り壊し以前の本丸門（明治10年代頃の撮影）  
〈原画、花岳寺所蔵〉

櫛形石垣	虎口左前（門櫛式）形式 使用石量 1.873t 面積 334.32㎡ 高さ 4.60m
一の門	木造脇戸付櫛門 入母屋造 本瓦葺 上階・下階構造 棟高 10.98m 使用材（櫟・桧・杉・松） 材積 75.03㎡ 瓦数 9,820枚 上階 桁行 13.36m 梁間 4.77m 軒高 7.70m 下階 桁行 8.83m 梁間 4.14m 軒高 4.78m
二の門	木造小戸付高麗門 切妻造 本瓦葺 桁行 3.89m 梁間 2.49m 軒高 4.62m 棟高 6.13m 使用材（櫟・桧・杉） 材積 10.97㎡ 瓦数 2,270枚
土堀中道	桁行 1.80m 梁間 2.41m 長さ 92.67m 幅 9.73m 長さ 18.82m

平成8年11月

赤穂市教育委員会



左手を見たところ/前方の石垣が張り出した所は東北隅櫓台/右手の石垣の折れは本斜(ほんひずみ)というらしい



右手を見たところ/前方の折れ(横矢斜/よこやひずみ)のある石垣の向こうの張り出した所も櫓台(西北横矢櫓形というらしい)



門は二重構造になっていて、この小さい門を抜けるとより大きな櫓門がある/これは高麗門形式の二の門



土橋(説明坂では中道と記されている)上で左手を見たところ



同じく右手を見たところ





ここが本丸大手門枡形/右手に折れている



これは振り返って二の門を見たところ



右手に折れた先を見たところ/石垣と土塀が周囲をぐるりと囲む/左奥には巨大な一の門(櫓門)がある



奥へ進んで、振り返って見たところ



こちらは雁木(石段)/土塀には色々な形をした狭間が並ぶ



その雁木の上から見た一の門(櫓門)/その前方が御殿跡



ここが御殿跡/発掘調査で分かった本丸御殿の位置を部屋ごとに詳細に平面復元されている



左手を見たところ





右手を見たところ



赤穂御城御殿絵図の説明板がある



あごうあしろごてんえぞ  
赤穂御城御殿絵図



これは、浅野家断絶後赤穂藩主になった永井家の所蔵文書の絵図で、美濃紙全体に基準格子を笥書きし、墨で輪郭線を入れている。御殿の部屋を柱位置を入れた色違いの紙に描き、切り貼りした図面である。

永井家史料（東京大学史料編纂所 所蔵）



## (説明文)

本丸の面積は約15,114m<sup>2</sup>あり、その2/3は領主屋敷、番所、倉庫等の建物と天主台、池泉などに占められ、残る1/3はくつろぎ（池泉を発掘調査）と呼ばれる空地になっていた。

当時の藩邸（御殿）は、右手（西）から大部屋を主とする表御殿、中奥、小部屋を主とする奥御殿に区分されていた。表御殿は大書院と小書院を組み合わせた形式で、広間は使者の間と組合わさって控室となり、そのほか勘定所や上台所が加わり、藩庁として使われていた。中奥は、藩主の居間と寢室からなり、台所が付属していた。奥御殿は藩主の寢間と5室の部屋（局）と台所が設けられ、うち2室は風呂と便所を備えていた。

復元された御殿は、浅野家断絶後入封してきた永井家の史料である赤穂御城御殿絵図（東京大学史料編纂所蔵）をもとに、赤穂城本丸内水筋図（赤穂高等学校蔵）、赤穂城引渡一件文書の播磨国赤穂城内本丸建屋改帳（花岳寺蔵）、発掘調査の成果などを考察して、建物跡を床高だけ高くし、コンクリート盤上に部屋の間仕切りを示し、板間、座敷間、土間、敷居、廊下、柱、縁などを表現した。また坪庭跡には木陰をつくるため、中高木を植栽した。

平成 8 年 11 月

赤穂市教育委員会

見取図に従って表示がされている



こんな塩梅



一の門(櫓門)を御殿内から見たところ





左手から見たところ



本丸庭園施設案内図

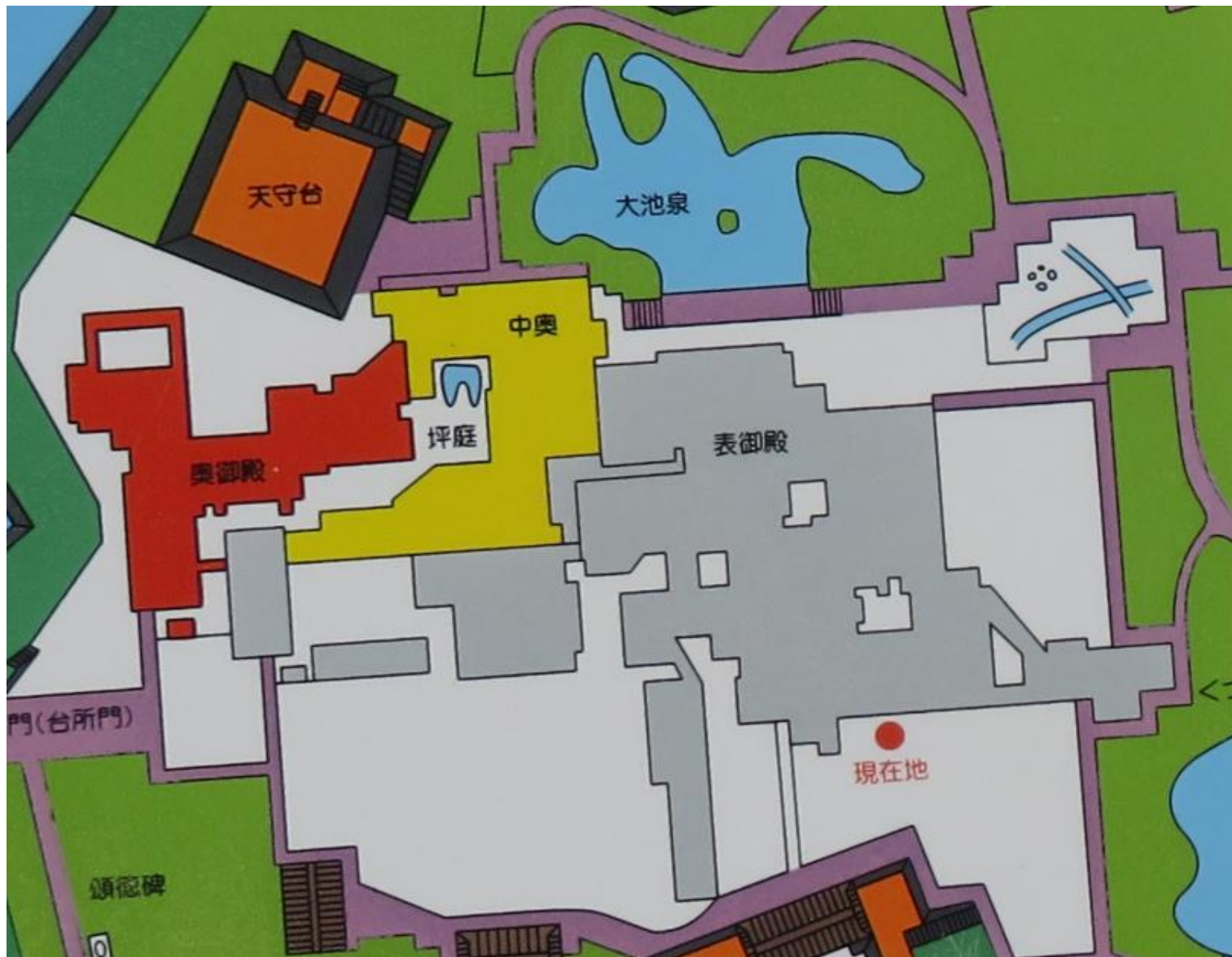
## 本丸庭園施設案内図



赤穂城は、正保2年(1645)に浅野長直が常陸国笠間藩から入封し、近藤三郎左衛門正純に築城設計を命じ、慶安元年(1648)より13年に亘る歳月を費やし、寛文元年(1661)に完成した甲州流軍学の海岸平城である。

本丸は、中央に藩主の屋敷(本丸御殿)、南東部には天守台、南に庭園などがあり、本丸門、刎橋門、厩口門の3門をもつ。天守台には天守閣は当初から築かれず、4箇所(東北隅、南隅、西隅、北隅)の櫓台のうち東北隅櫓台のみ隅櫓が築かれ、ほかは横矢柵形として配されていた。

平成10年3月 赤穂市教育委員会



御殿の南側は池泉庭園となっている



赤穂城本丸大池泉の古い看板



これは石組暗渠排水路/その前方には土塁が廻っている





さて、正面が本丸の南東部に築かれた大天守台/5層の壮大な天守閣を建造する計画だったが、天守閣が築かれることはなかった



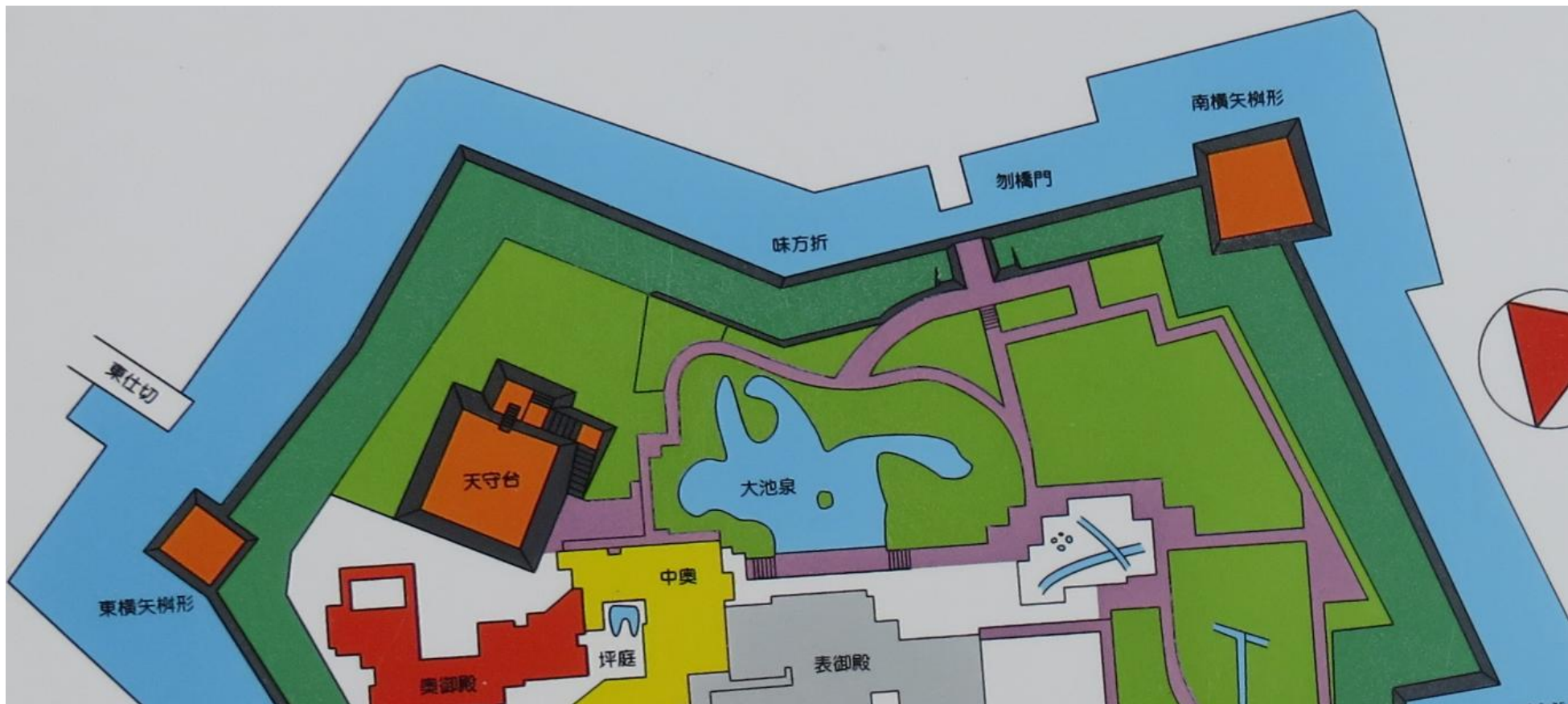


ここから登ってみる



天守台の上は芝生が敷き詰められていた





南西方向を見たところ/御殿の池泉庭園の外側を廻る土塁と、刎橋門(はねばしもん)や南横矢柵形が見える



勿橋門(左手前)と南横矢櫓形(右奥)をアップで見たところ



その右手を見たところ



その右手の一の門(櫓門)を見たところ



アップで見たところ





これは更に右手、東側の厩口門(台所門)を見下ろしたところ



さて、これは御殿内から厩口門を見たところ/高麗門形式の小さな門



# 厩口門うまぐちもん（台所門だいどころもん）

構造形式	高麗門	木造	切妻造	本瓦葺
主要寸法	桁行三・八五m	軒高四・六六m	梁間二・七三m	棟高六・一三m

浅野家時代には「厩口門」、森家時代には「台所門」と呼ばれていた。廃城後に失われ、後には県立赤穂高等学校の通用門として周辺石垣も改変されていた。

平成八年（一九九六）に実施した発掘調査によって、門の礎石・地覆石などが良好な状態で見つかり、高麗門形式の門であったことが判明した。また、絵図史料などから、本丸門の高麗門と同規模であったことが分かっており、発掘遺構ともよく合致している。これらの資料をもとに、平成八〜三年（一九九六〜二〇〇一）に門、橋、土塀及び周辺石垣が復元整備された。また、門に向かって左の石垣は曲面を描き、さらに横矢枅形よこやまたを設けるなど、その縄張なむしは大きな見所となっている。

厩口門橋で左手を見たところ/前方石垣の張り出しは東北隅櫓台



同じく、右手を見たところ/正面は東横矢柵形



厩口門橋と厩口門を見たところ



そこで左手を見たところ



同じく右手を見たところ/東北隅櫓台が見える





これは東北隅櫓台(右手)脇から既口門方向を見たところ



そこで右手に本丸門方向を見たところ



東北隅櫓台/ここだけに隅櫓が築かれた(他は横矢櫓形となっている)



右手方向へ進むと本丸門が見えて来る



本丸門



さて、ここは三之丸にある片岡源五右衛門宅址



標柱と説明板が立っている



片岡源五右衛門高房

側用人 児小姓頭  
三百五十石  
表門隊 行年三十七歳

源五右衛門は、浅野内匠頭長矩公とは同年齡で、幼い頃から君側に召し出された寵臣であった。出世加増の少ない元禄時代に、初め百石であった俸禄が、十九歳で二百石、二十四歳で三百石、元禄十二年（一六九九年）正月には、三十二歳で三百五十石えを給せられている。

元禄十四年（一七〇一年）三月十四日内匠頭の登城に従い、江戸城に赴いた源五右衛門は下乗で供待中、主君の刃傷を知らされ、鉄砲洲上屋敷にとつて返し、藩邸留守居の諸士に大事を伝え事態の收拾にあたった。田村邸において切腹直前の内匠頭に拝顔、内匠頭も源五右衛門に氣付いたが、主従は共に声なく、今生の別れを惜しんだのであった。討ち入りの時は表門隊に属し、富森助右衛門、武林唯七と三人組合って、真っ先きかけて屋敷内に踏み込み、朱柄の十文字鎗をふるって戦った。細川家にお預けののち、二宮新右衛門の介錯で、従容として切腹した。



このエリアが片岡源五右衛門宅址のようだ



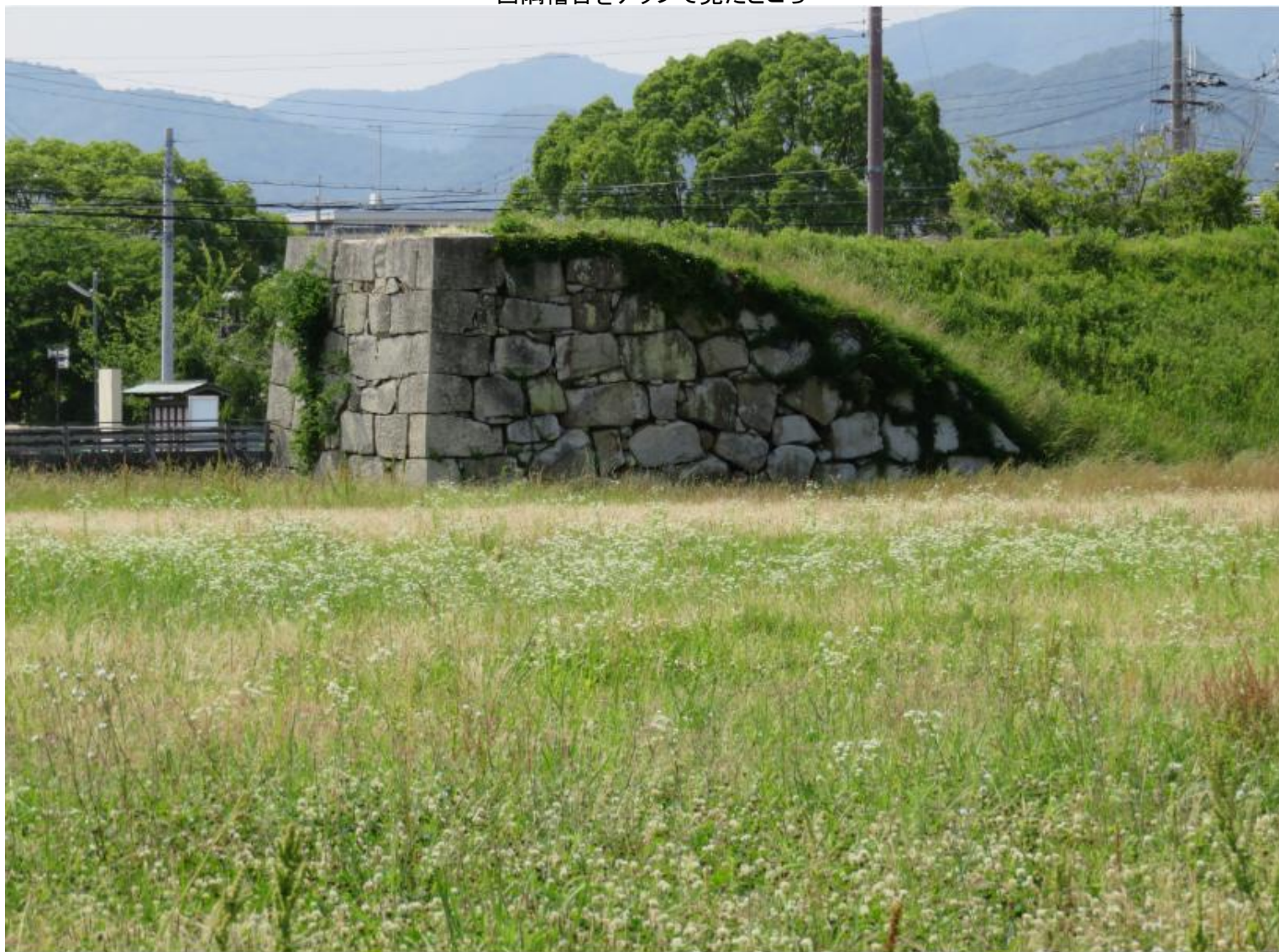
これはその近くから、南西方向を見たところで中央に北櫓台が見える/左奥には本丸門、右手には西中門へと石垣が続いている



前方は西隅櫓台/右手から土塁が繋がっている



西隅櫓台をアップで見たところ



さて、ここが三ノ丸西端に鎮座する「大石神社」







参道の脇にずらりと並ぶ四十七士石像







義芳門



## 義 芳 門

この門は東の楠公西の大石と称せられる我が国の二大忠臣義士のうち楠正成公をお祀りする神戸の湊川神社の神門であったのを昭和十七年移築したものである。

明治天皇の思召しで明治五年湊川神社が創立せられた時建てられた檜材入母屋造四脚門の豪快な門である。

幸い義士発祥の当地に移されていたため過る大東亜戦争の神戸大空襲にも焼失を免れ今日百有余年を経てなお其の偉容を誇っている。

なおこの門は義士の忠芬義芳を千歳までも伝える意味で「義芳門」と称している。

これが四十七士筆頭、大石内蔵助良雄石像



義芳門を潜って、振り返って見たところ







大石神社拝殿





振り返って見たところ



境内に立つ、もう1つの大石内蔵助像



浅野家大阪蔵屋敷の舟石



# 浅野家 大坂蔵屋敷の舟石

この舟石はその昔、赤穂浅野家、大坂藩屋敷（現在大阪市北区中之島四丁目常安橋付近）の庭にあったものである。  
大きさは長さ三メートル、中一メートル二十センチ、重さ約二トンの自然石で水穴は長さ一メートル、中六十七センチの花崗岩の一枚石である。  
この石によって蓬莱山の不老不死延命長寿の秘薬を求め、金銀財宝を得んとする中国の神仙思想から大名屋敷や社寺の庭園に据えられたものである。

株かん川本舗

小畑 延子男

平井 幸子

土師川保行会

岡 寛太

西野 克美

源 頼 安 彦

近世 寺田 祐三

新山屋 益原 文治郎

守岡 光男

さざれ石





国歌岩代に詠われる七ざれ石

国歌岩代の七ざれ石は、長年岩が付近の小石を接着し、大きな固まりになったものであり、年と共に成長しやがて岩と化す。岩の指を添えて、信仰があります。岐阜県春日村産天然記念物の七ざれ石が有名であるが、この産地、神頂いたのは、地層が同質の岐阜県海城南田中郡山溪より採り出された七ざれ石である。ご参拝の皆様、にこの七ざれ石から霊力が授かるよう祈念致します。

井戸田 中子美  
大石 文生  
大 花子  
大 愛子

「義士発祥之地」と記されている



そこから見える大手隅櫓





さて、ここは花岳寺/この山門は、赤穂城の西惣門を移築したものという



浅野公霊廟義土木像という標柱が立つ



# 台雲山 花岳寺

当山は曹洞宗に属し、正保二年赤穂藩祖浅野長直公によりて建てられた寺である。

元禄事变後は歴代藩主の菩提寺となっていた境内には義士の三十三回忌に刻んだ四十七士の木像、宝物、墓所等があつて赤穂に杖を曳く者の必ず訪れる史蹟地である。

新西国第三十一番霊場  
瀬戸内第七番観音霊場





鐘楼/鳴らずの鐘



## 鳴らざるの鐘

この梵鐘は赤穂二代藩主浅野長友公が父長直公のために  
鑄造したものである。ところが三代長矩公の代に至  
り、吉良義央へ殿中に於て刃傷に及んだ事から、

赤穂浅野家は三代で断絶した。元禄十五年十二月十四  
日、家臣四十七人は吉良邸へ討入り、長矩公の無念  
きはらした。翌年二月四日四十六士は切腹を仰せつか  
り、四候郎で見事に自刃した。この報が赤穂に届  
いたので、町民は四十六士の死を悼み悲しみ花岳寺に  
集まり、この鐘を撞いてついてつきまくり、「爾来音韻を  
失すること五十年」と寛政九年再改鑄のこの梵鐘に銘記し  
てある。音韻を失していた間を赤穂では誰いうとなく  
鳴らざるの鐘といっていた。

この度の戦争で  
全国の寺々の鐘は供出を命じられたが、この鐘は「義士との由緒深  
きによろ」供出を免れた赤穂市内唯一の梵鐘である。

さて、赤穂藩の上水道システムは日本三大水道の一つと言われる画期的なシステムだったとのことで、その遺構が数々残っている





ももろやうらおおます  
**百々呂屋裏大柁 (旧赤穂上水道)**

赤穂の城下では、海に近かったため地下水が飲用できず、元和2(1616)年に、熊見川(現在の千種川)の7km上流から取水し、そこから城下まで水を引いて、飲用水とした。

赤穂城下町の北端であるこの場所には「百々呂(路)屋裏大柁」と呼ばれる2間(約4m)四方の石組み大柁があった。大柁の手前では、余水を東の熊見川に戻す水量調整のほか、竹貫によるゴミの除去がなされたという。

大柁では、北から開渠で導水されていた川水の砂等を沈殿させて浄化し、これより南は暗渠となって地下を通し、瓦管、竹管、木樋、土管、陶管などによって城下、城内、各戸に給水されていた。

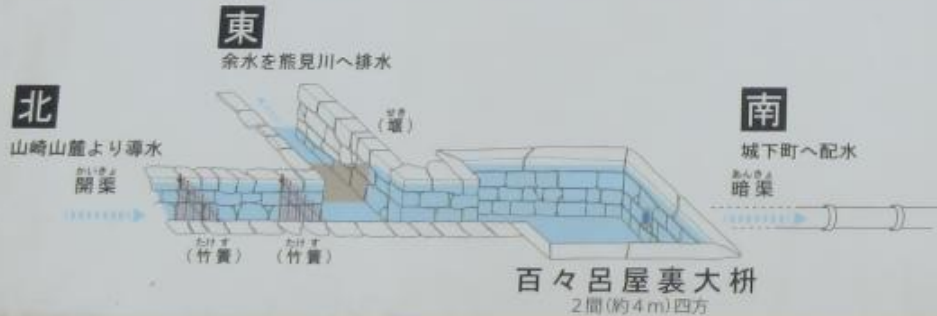
歩道に黒色で示された方形の区画は、発掘調査で確認された大柁の位置を示したもので、区画内にある長細い石材は、大柁の一部を移設保存したものである。



右絵図の拡大



「赤穂城下水筋絵図」  
 (江戸時代後期・赤穂市教育委員会蔵)



息継ぎ井戸



## 赤穂旧上水道

赤穂城は海岸沿いに築かれ、その城下町も千種川ちくさがわ河口のデルタ上にあります。赤穂旧上水道は、良い飲料水を得るため約7キロメートル上流の千種川ちくさがわから取水し導水路を経て城下町・城内へ配水したものです。この敷設工事は、17世紀前半に池田氏の代官(郡代)垂水半左衛門たろみ はんざえもんが指揮をして行われました。

赤穂旧上水道は侍屋敷だけではなく町家にも汲出枧くみだします(井戸)を設けて各戸へ給水していることが特徴です。江戸の神田上水や備後の福山上水とともに日本三水道の一つといわれています。

## 息継ぎ井戸

元禄14年(1701年)3月14日に江戸城松之廊下まじょう まつのろうかで、赤穂藩主浅野内匠頭長矩あこう ほんしゅ あきの たくみのかみ ながのりが吉良上野介義央きら こうずけのすけよしひさを切りつけるという刃傷事件にんじょうじけんが起きました。早水藤左衛門はやみ とうざえもんと萱野三平かすの さんへいがその大事件を知らせるため、江戸から早駕籠はやかごに乗り4日半かかって19日の早朝赤穂城下に到着しています。その時、この井戸で二人の使者が水を飲み一息継いで赤穂城へ向かったと伝えられています。

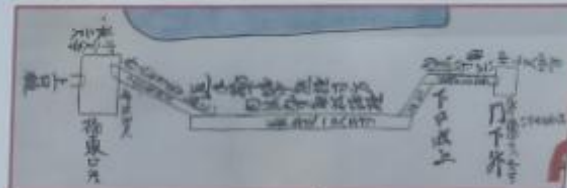
きゅう あこう しょう すい どう しょう ない はい すい "conduits to Akojo castle"  
**旧赤穂上水道 城内への配水**  
 Old Waterworks in AKO

赤穂の地は、井戸を掘っても海水が出るため、城と城下町の整備には、上水道の整備が必要不可欠でした。

赤穂城下を潤すため、元和2（1616）年に敷設された旧赤穂上水道。城下町の家々を潤してきた終着点が、ここ赤穂城です。赤穂城の周囲は外堀や海で囲まれているため、旧上水道の配水路は「サイフォン」の原理を用い、外堀の下をくぐらせ、水圧によって城内側へ吹き上げさせていました（右上拡大図）。

城内へ配水後は、三之丸の侍屋敷や二之丸庭園へ給水したのち、本丸内にある藩主御殿や庭園の池泉を潤し、最後は瀬戸内海に排水されました。

大手門の橋の下に設置された「サイフォン」の図面（拡大）



大手門橋形の発掘調査で見つかった「門下軒」



発掘調査で見つかった赤穂城跡三之丸大手門橋形の上水道遺構



「赤穂本丸内水筋縮図面」（江戸時代末期）（兵庫県立赤穂高等学校所蔵）



「赤穂城内水筋縮図面」（江戸時代末期）（赤穂市教育委員会所蔵）

QRコードで  
もっと知る！



赤穂といえば、これ！



城郭のようなこの建物はお菓子屋さん



郵便ポストもこんな塩梅



最後はやっぱり、これだね！





参考ホームページ

<http://mizuki.my.coocan.jp/hyogo/akou.htm>

<http://www.asahi-net.or.jp/~qb2t-nkns/akou.htm>

<http://www5f.biglobe.ne.jp/~mononofu/akouzyou2.html>

<https://akiou.wordpress.com/2015/05/21/akou/>

<http://www.hb.pei.jp/shiro/harima/ako-jyo/>

<http://www.takakurashoten.sakura.ne.jp/castle/kinki/akou/akou.htm>

[http://www.hat.hi-ho.ne.jp/moch/castle/castle\\_55.htm](http://www.hat.hi-ho.ne.jp/moch/castle/castle_55.htm)



